2020年度 Unity講座(基礎編)

04回目

講師:幸田 将伍 (@MagurodonDev)

今回の講義の目的

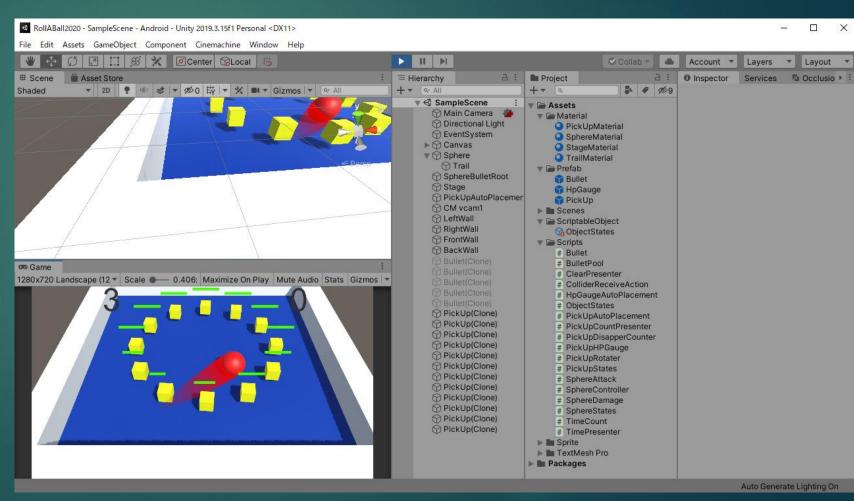
- プログラムを自分で読めるようになる
- ▶ Unityを使って自分が実現したいことをできるようになる
- 自分一人でもゲームを作成できるレベルになる
- ▶ Unityの活用事例を学び、自分の進路に役立てる
- ▶ 実際のエンジニアがどういった仕事の進め方をしているかを知る
- ゲーム会社のクライアントエンジニアとして就職できるレベルになる

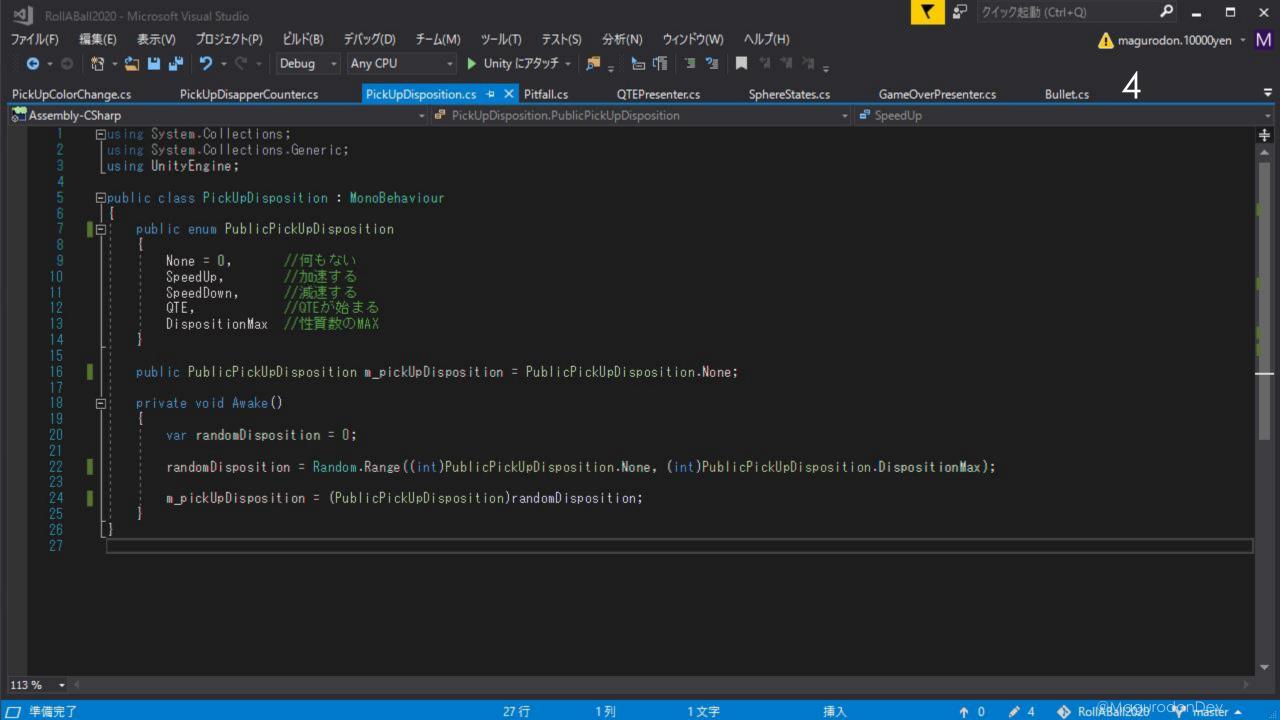
一緒にレベルアップして行きましょう!

Unity

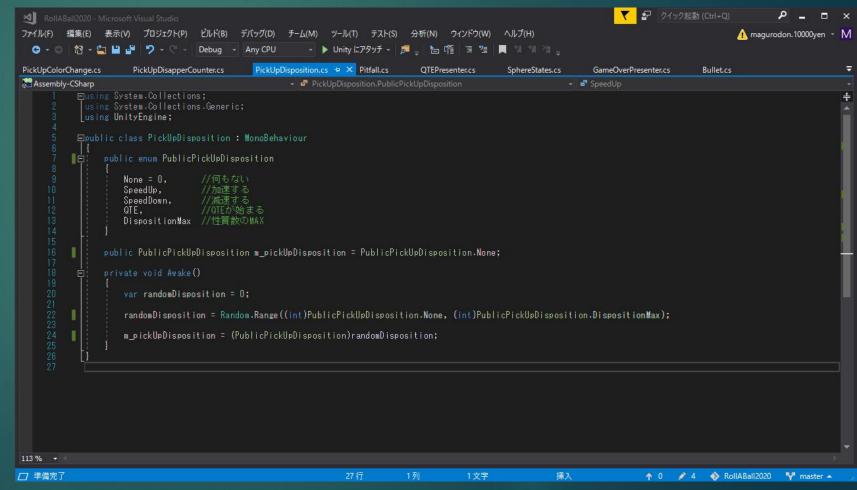
RollABall

- 前回はSphere側の仕様は全て満たしました
- 今回はPickUp側の仕様を完成させていきましょう
- ランダムで自分の色を変え、その色によって特定の効果を与える
- →QTEが始まったり(2秒以内 に特定の文字を入力しろ的な)
- →加速したり、減速したり
- ランダムで自分の色を変え、その色によって得点が変わる
- このあたりを実装していきます
- PickUpDispositionを作成します

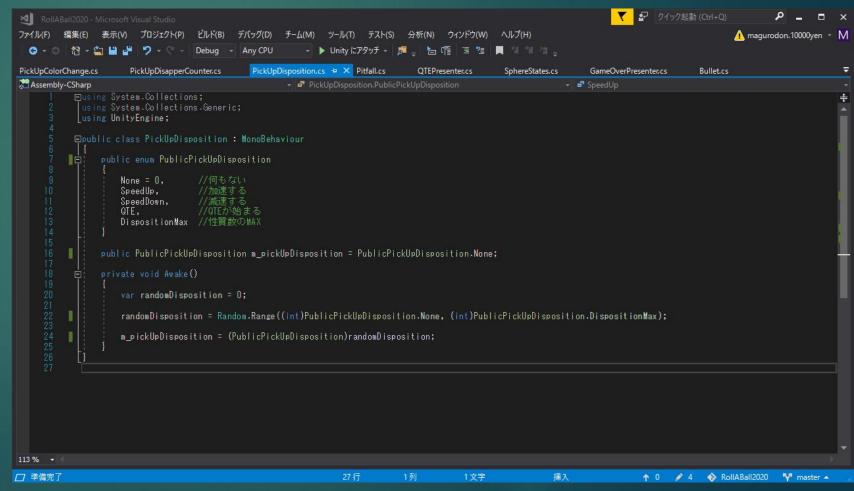




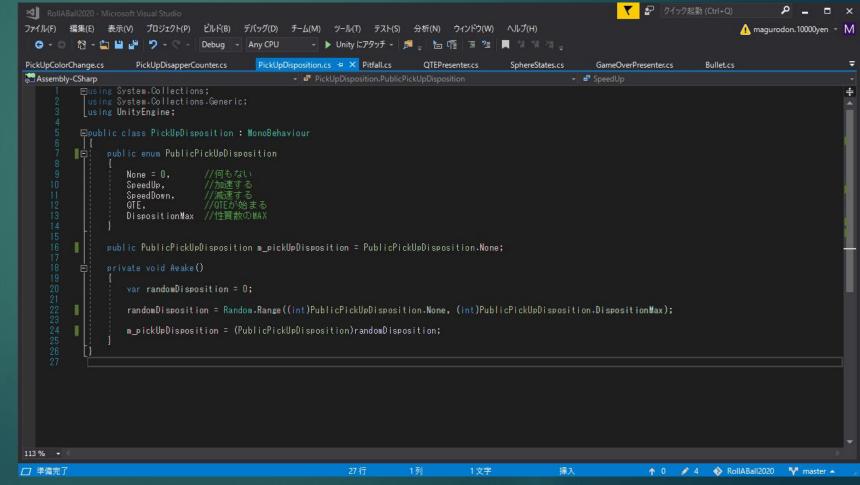
- ※Random.Range(Min,max)
- ランダムはゲームの世界でとて もよく使われます
- この関数の取り扱いですが少し 注意をしなければいけません
- Int型の場合は、Minは大丈夫なのですがMaxが指定した値の-1になります
- Float型の場合はそんなことはないので気をつけましょう
- 今回はenumでPickupのもつ性 質を、ゲーム開始時にランダム で決めています

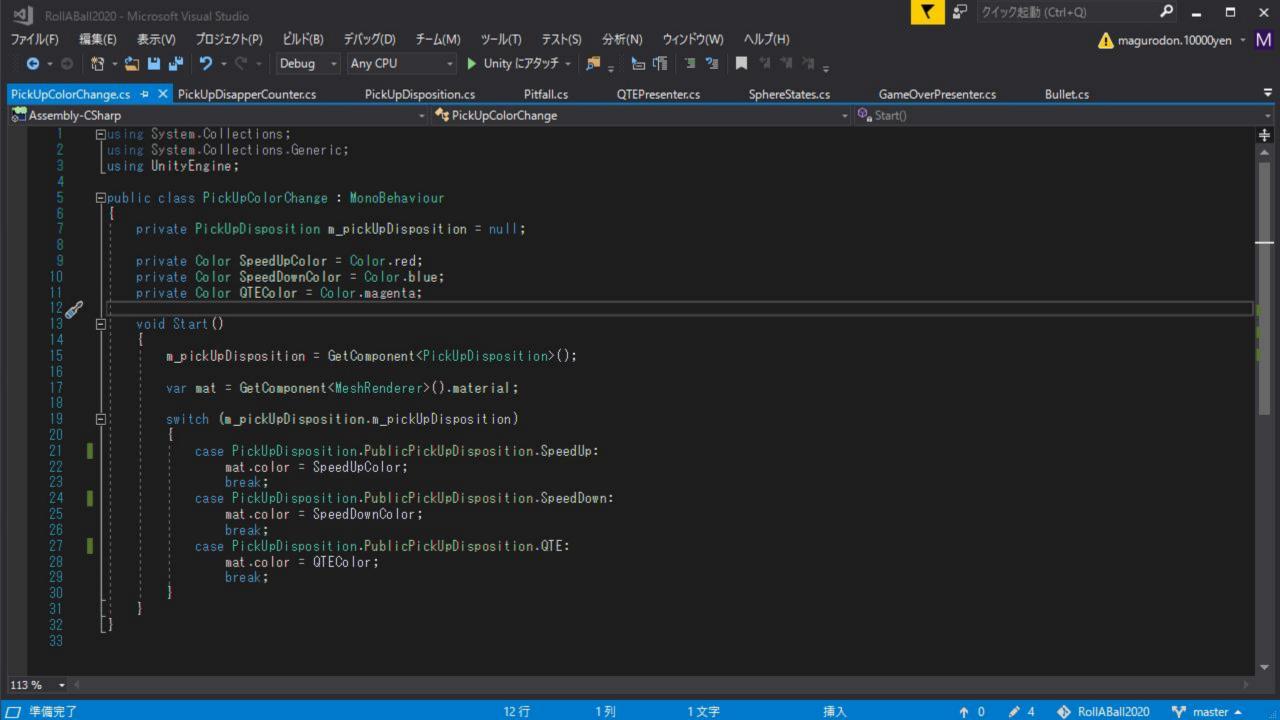


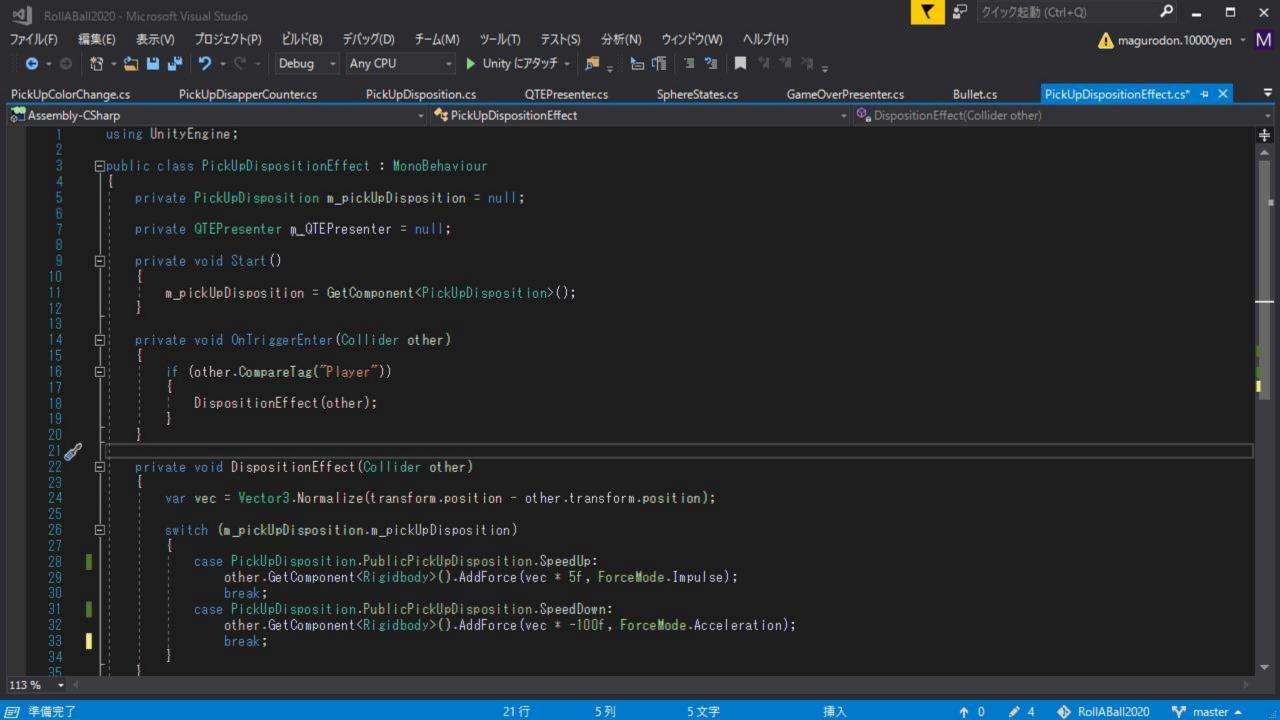
- ※(Hogehoge)hogehoge
- 値を違う型に変換したいときに つかわれます
- 今回でいうと
 (int)PublicPickupDisposition.N
 oneは0になりますし、例えば
 (PublicPickupDisposition)2は
 PublicPickupDisposition.Speed
 Downになります
- ここでクイズです
- (int) PublicPickupDisposition.QTEは 何になるでしょうか
- こういったことを、キャストする、やコンバートする、等言います



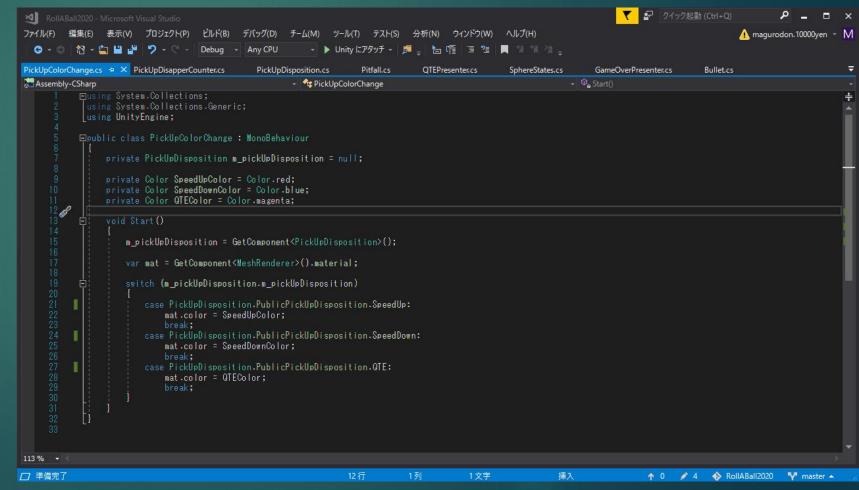
- さて、次にPickUpDispositionに よって変化を起こすスクリプト を書いていきます
- PickUpColorChangeとPickUpDispotisionEffectを作成しましょう



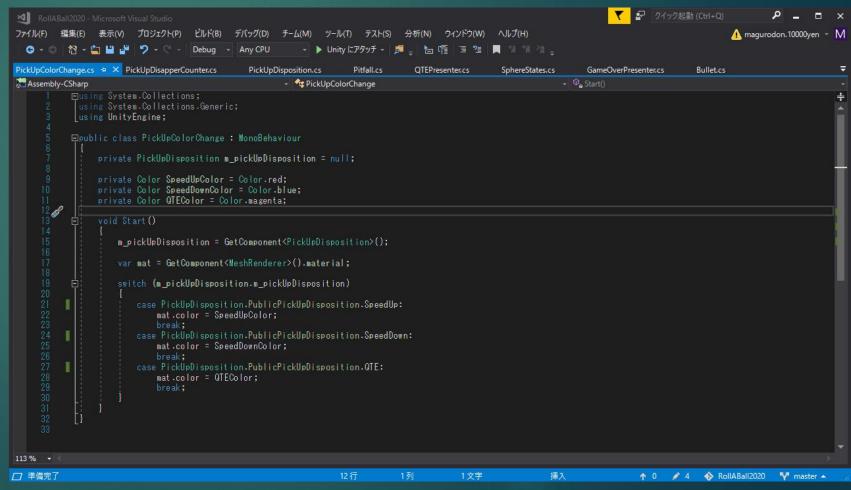




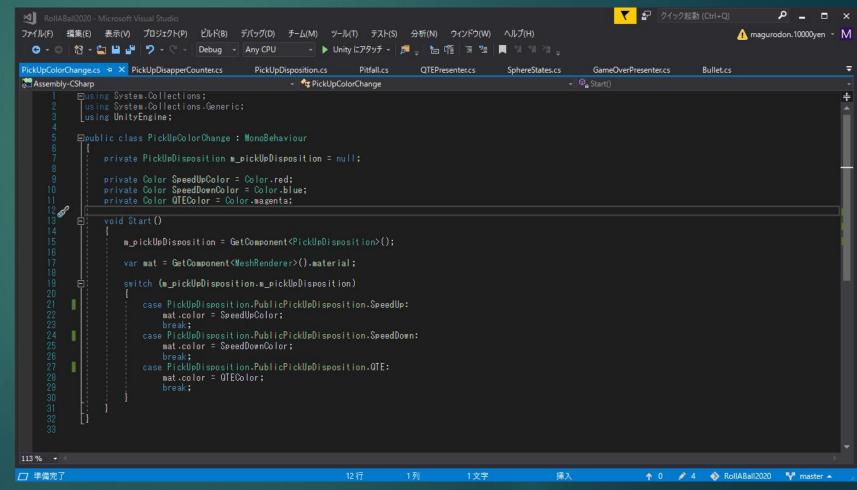
- ※Switch文について
- 今回は新しい文法、Switch文に ついて解説していきます
- Switch文とは一つの値に対して 条件を分岐する場合にif文の変わりに使われる文法です
- 今まではif文によって、条件を分 岐してきました
- ただし、if文はもし~であれば、 という意味を、同じ値に対して 基本的には一つしか持てません
- 無理をしてif文を重ねることもできるのですが、可読性が高くないので、一つの値に対して条件を分岐する場合はSwitch文などを使うと見やすくと書けます



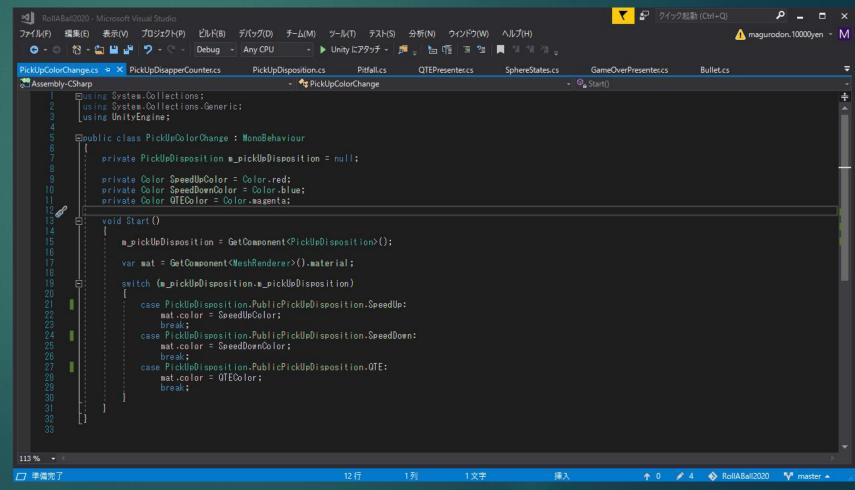
- ※Break;
- Switch文の中でよく出てきます
- これが出てきた場合、CPUはこのSwitch文の中の処理を止めて次の処理に向かいます
- その処理の流れを壊して(Break) して外に出るというイメージで 覚えましょう



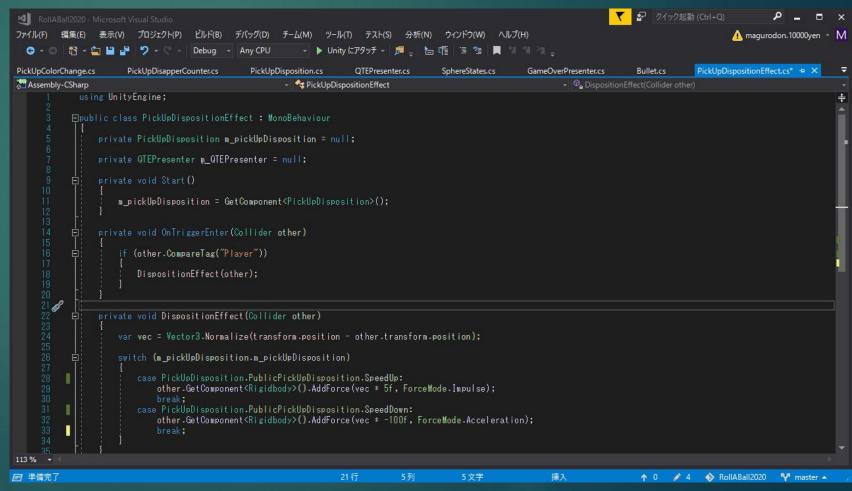
- ※Color型
- 色もプログラムで制御すること が可能です
- 今回はUnity側で用意してある Color型の定数を使いました
- もちろん、Color型(r,g,b,a)の変数を新しく定義すれば好きな色に変換することも可能です
- 色について少し深くお話します



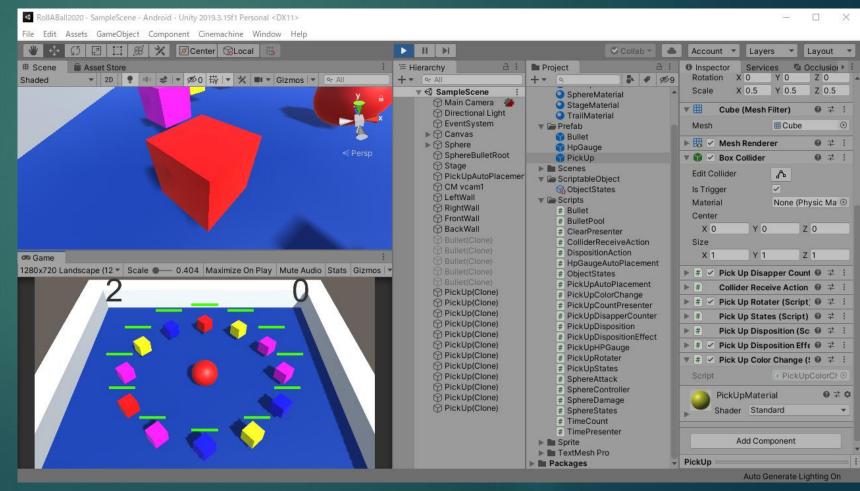
- プログラムにとって色を表現する時に使われる値は、基本的には0~255までの数値をR,G,Bの3つの数値を掛け合わせたものを使います
- 例えばColor(255,0,0)は赤です し、Color(0,255,0)は緑、 Color(0,0,255)は青です
- 何か自分の使いたい色を表現したい場合は、Unityのカラーパーレットに表示されているR,G,Bの数値をよく見てみましょう
- その3つの数値をColor(r,g,b)に 当てはめれば好きな色に変える ことができます



- さてPickUpDisipositionEffectに ついて解説していきます
- %Vector3.Normalize(Vector3)
- 長さを1.0fとして引数に入れられた方向のベクトルを返します
- 今回はPickUpからSphereの距離 の差分を出し、それをもとにそ の方向のベクトルを出していま す
- お気づきの方もいるかもしれませんが、QTEの分岐分けがまだないです
- 理由はQTEは毛色の違うゲーム システムを突っ込むことになる ので、今は開けておきます



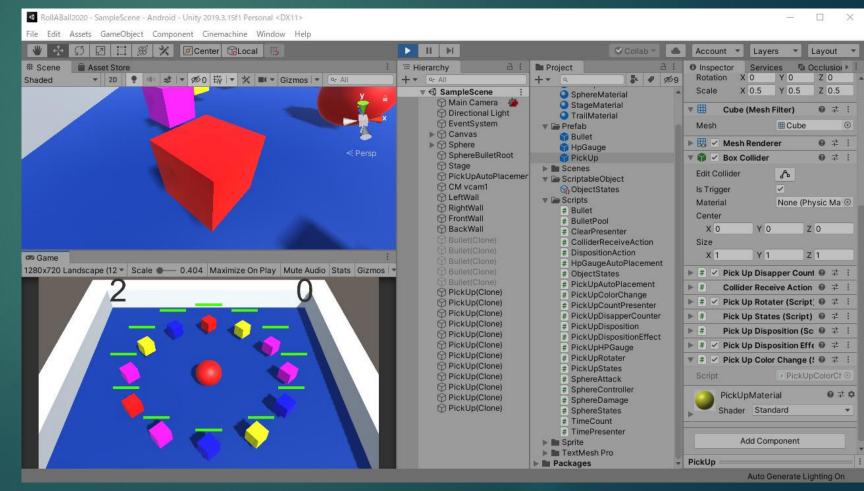
- Unityに戻って確認します
- Prefabフォルダ内にあるPickUpに今回作成した
 PickupColorChange,PickUpDispositionを
 D&Dしていきます
- プレイして確認してみましょう
- 右図のようにカラフルになれば 成功です
- さて、それではQTEを実装して いきましょう

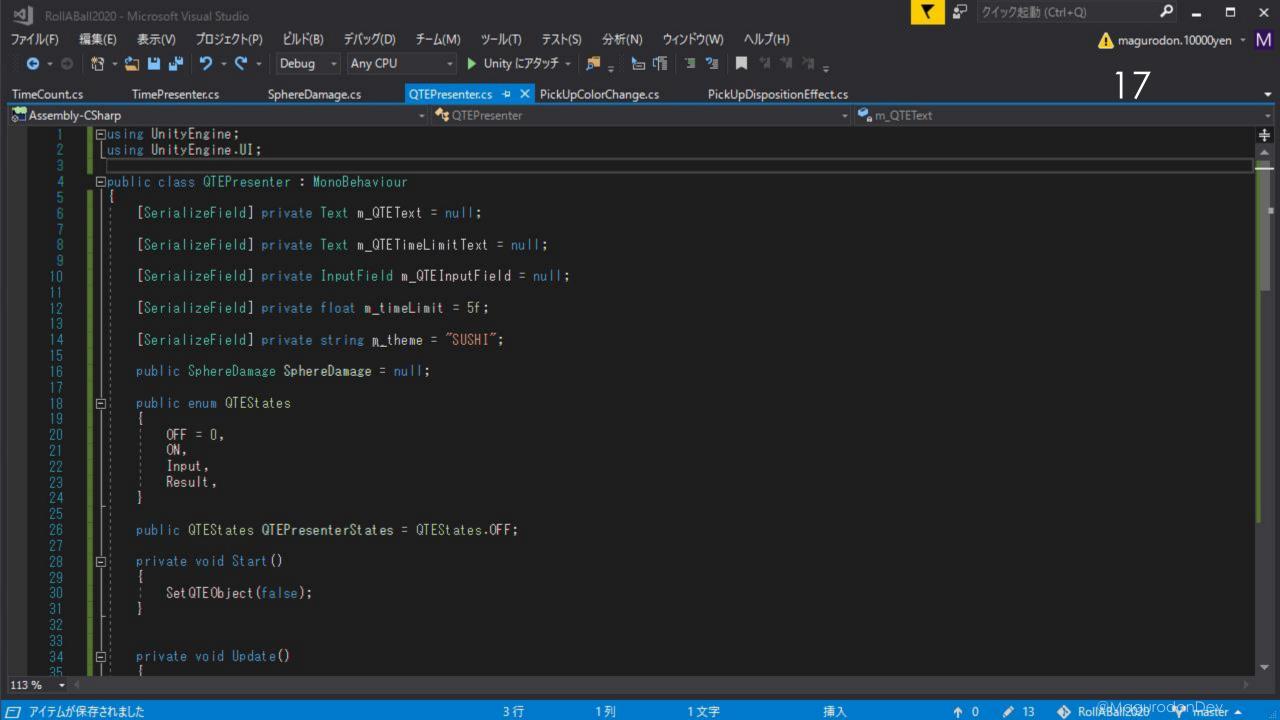


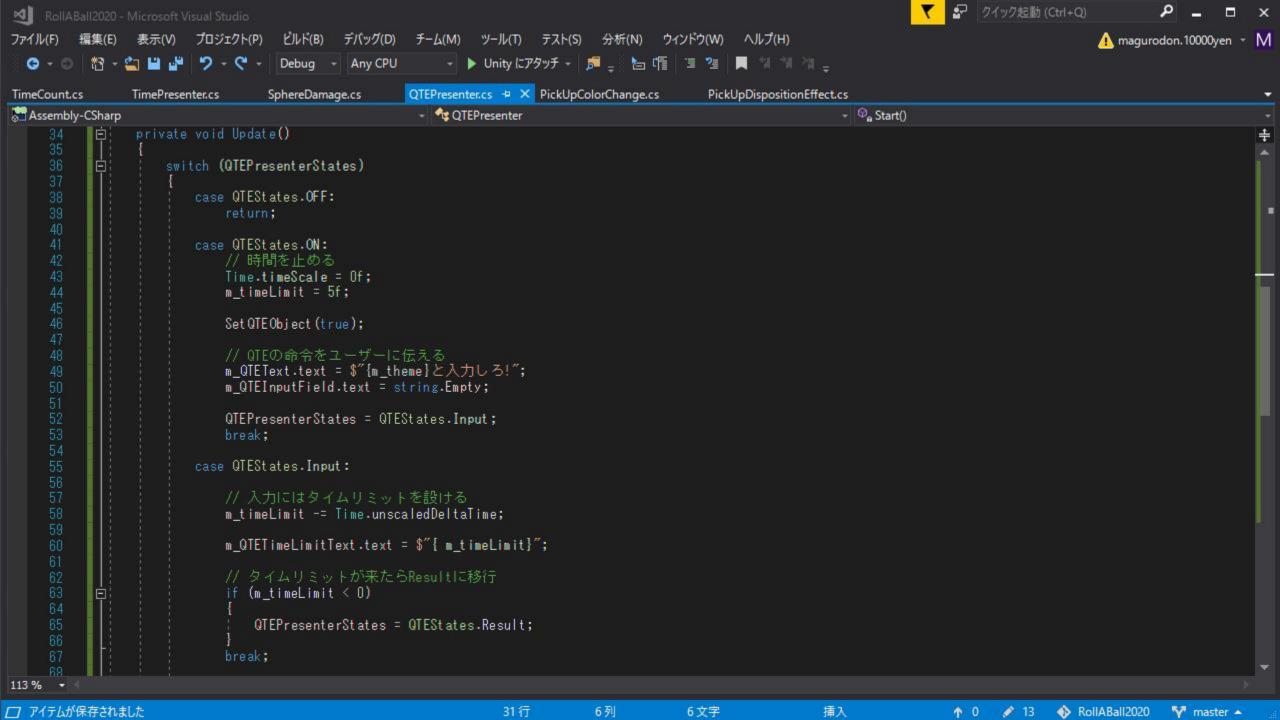
Unity

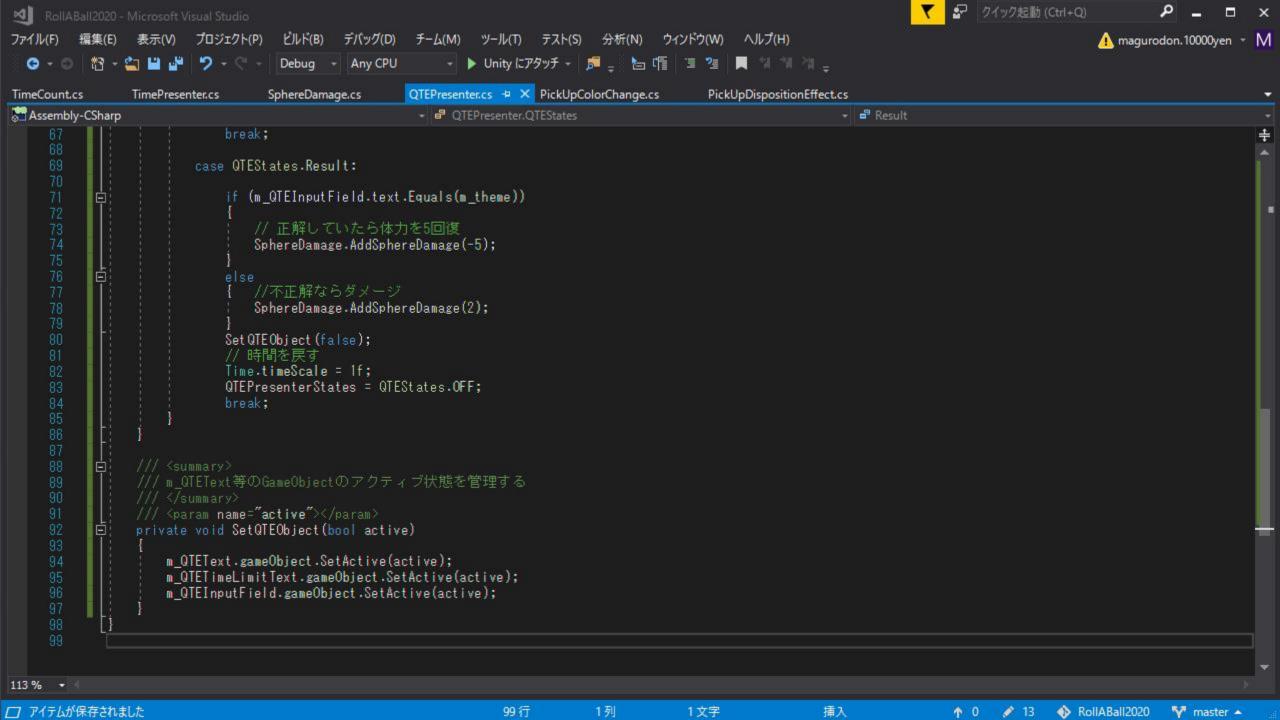
RollABall

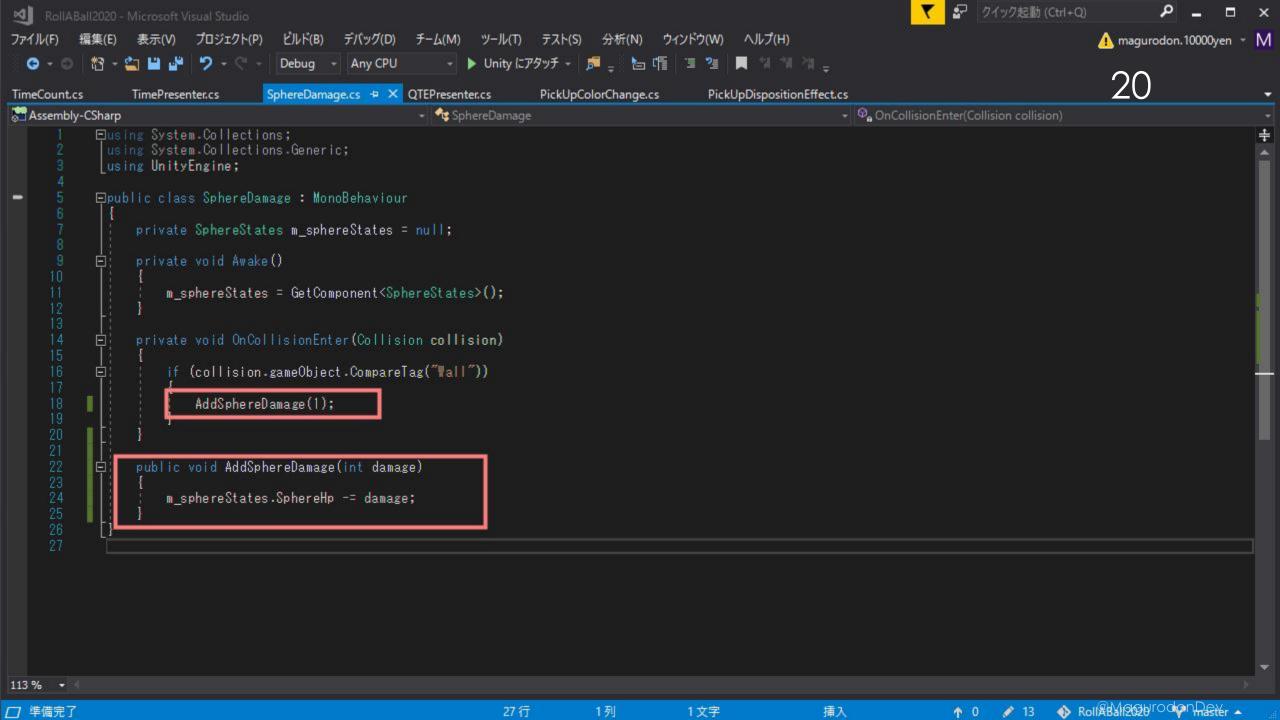
- QTEとはクイックタイムイベン トの略です
- このゲームシステムを使っているゲームは有名なところでいうと「龍が如く」シリーズや「バイオハザード」シリーズ等があげられます
- 時間制限付きで、プレイヤーに 入力させ、その可否でゲームに 影響を与えるイベントです
- ゲームデザインとしては賛否両 論あるシステムですので、利用 は計画的に行ってください
- さて、QTEPresenterを作成して ください
- SphereDamageも修正していきます



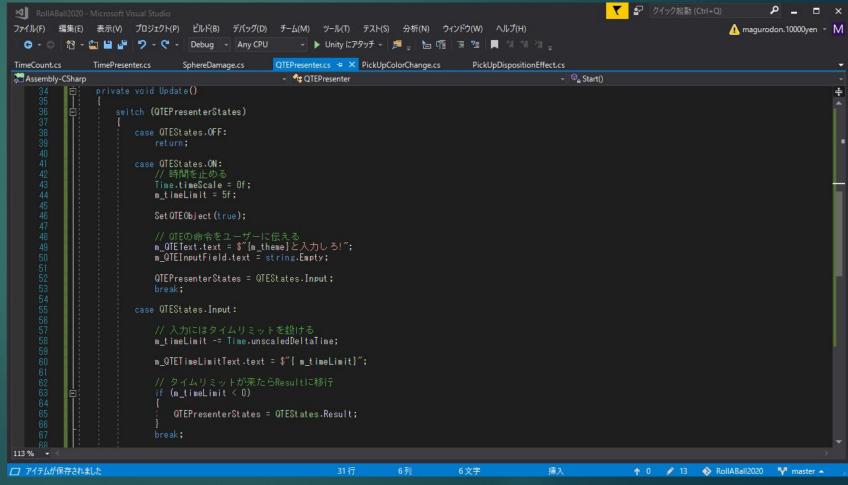




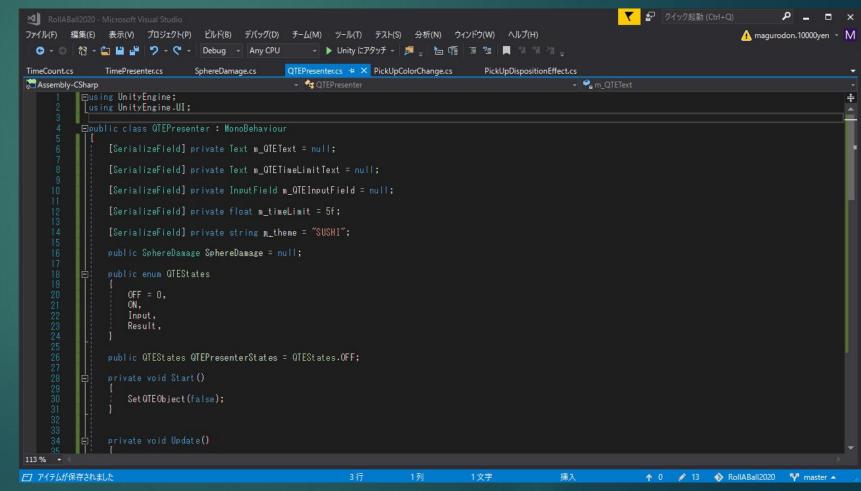


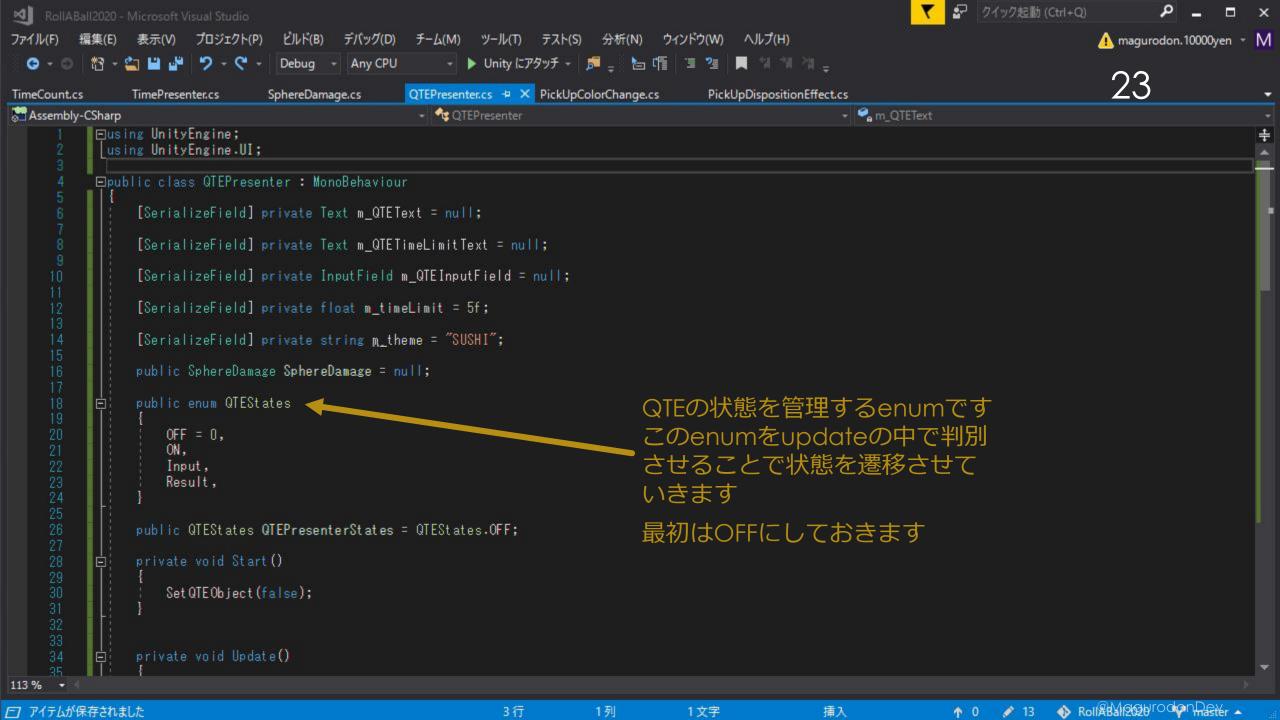


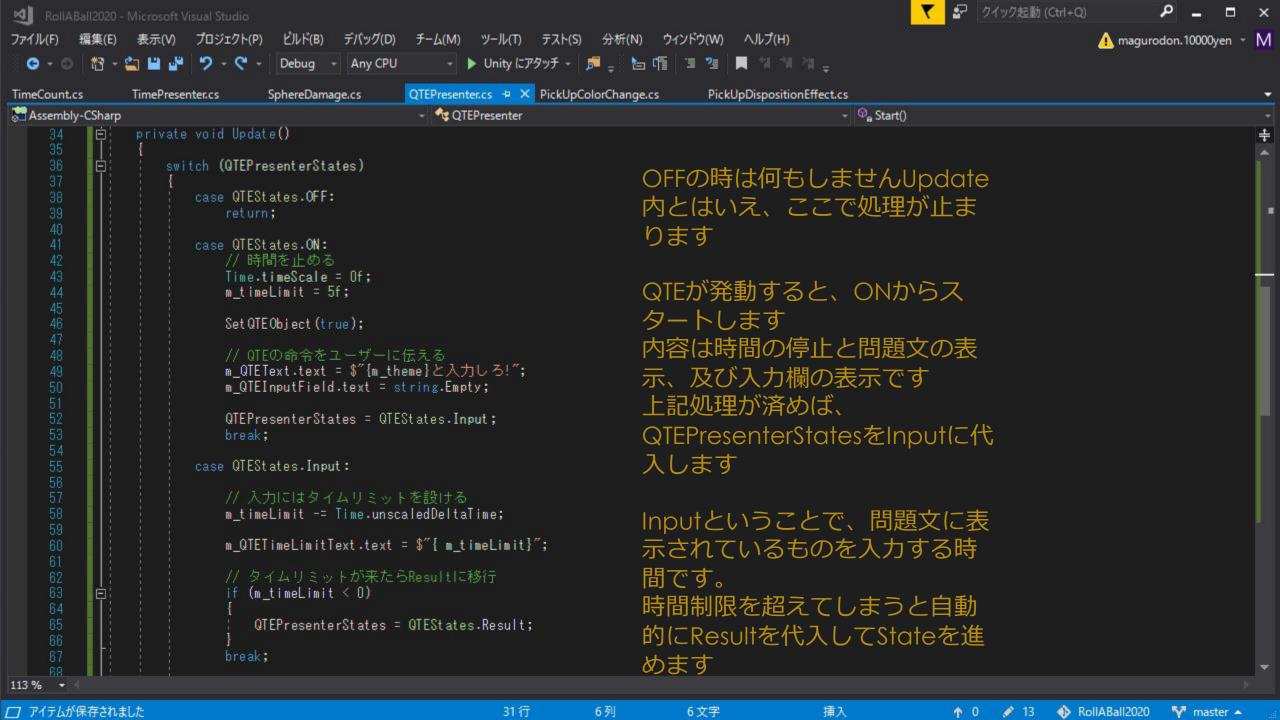
- ※TimeScaleとは
- スローモーションなどによく使われる関数です
- TimeScaleが0になった場合、 FixedUpdate関数は呼び出され ません
- つまり物理制御は全て止まりま す
- フレームレートに依存していない関数も全て止まります
- 今回はunscaledDeltaTimeとい うTimeScaleに干渉されない deltaTimeを使用しています
- deltaTimeとはフレームとフレームの間の時間でしたね、思い出してください

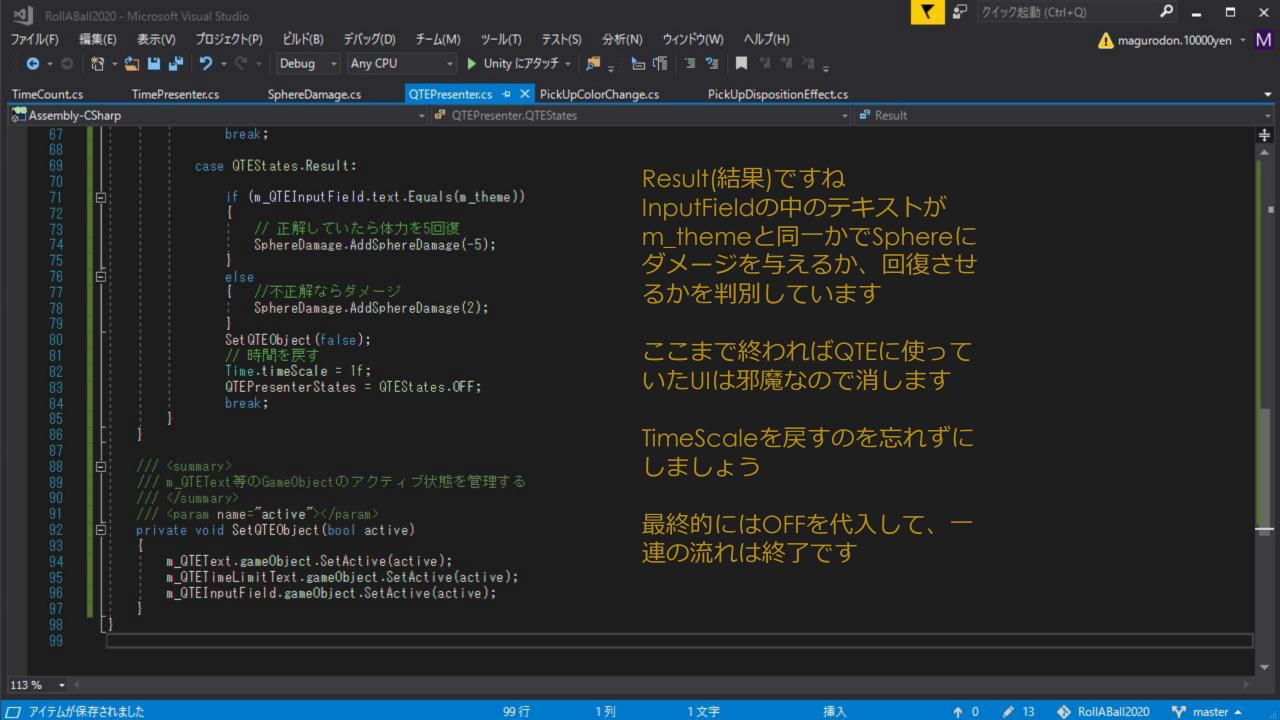


- ざっくり、今の時点で質問ある 方おられますか
- 正味、今何を書いているかわからない方、正直に挙手してください
- そろそろ皆さんにコツを伝授していきたいと思います
- 日本語に変換していくので、コメントに書いて下さい
- プログラムも言語のひとつです
- 日本語で書かれているものをプログラムにしているだけなので、 逆をしてあげればいいです
- C#は高級言語なのでそれが可能 です

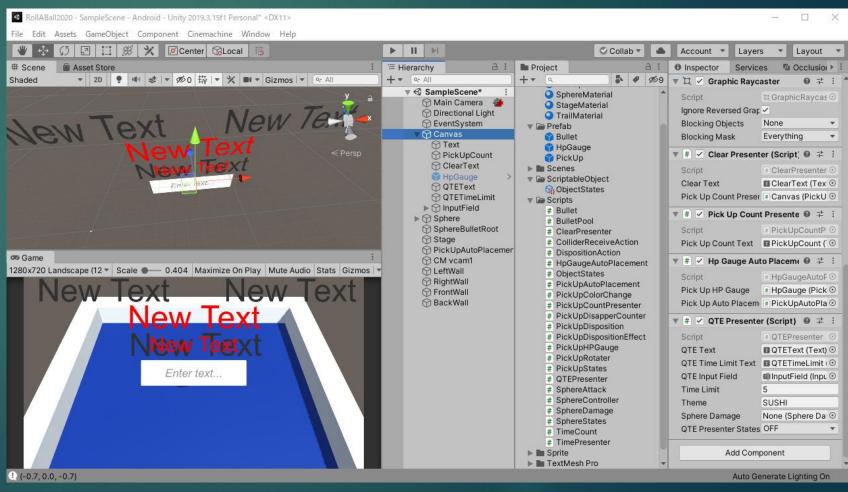




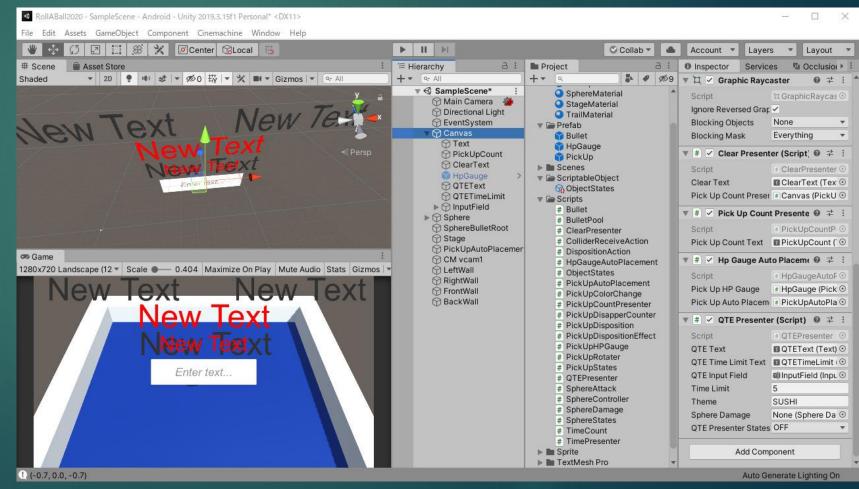


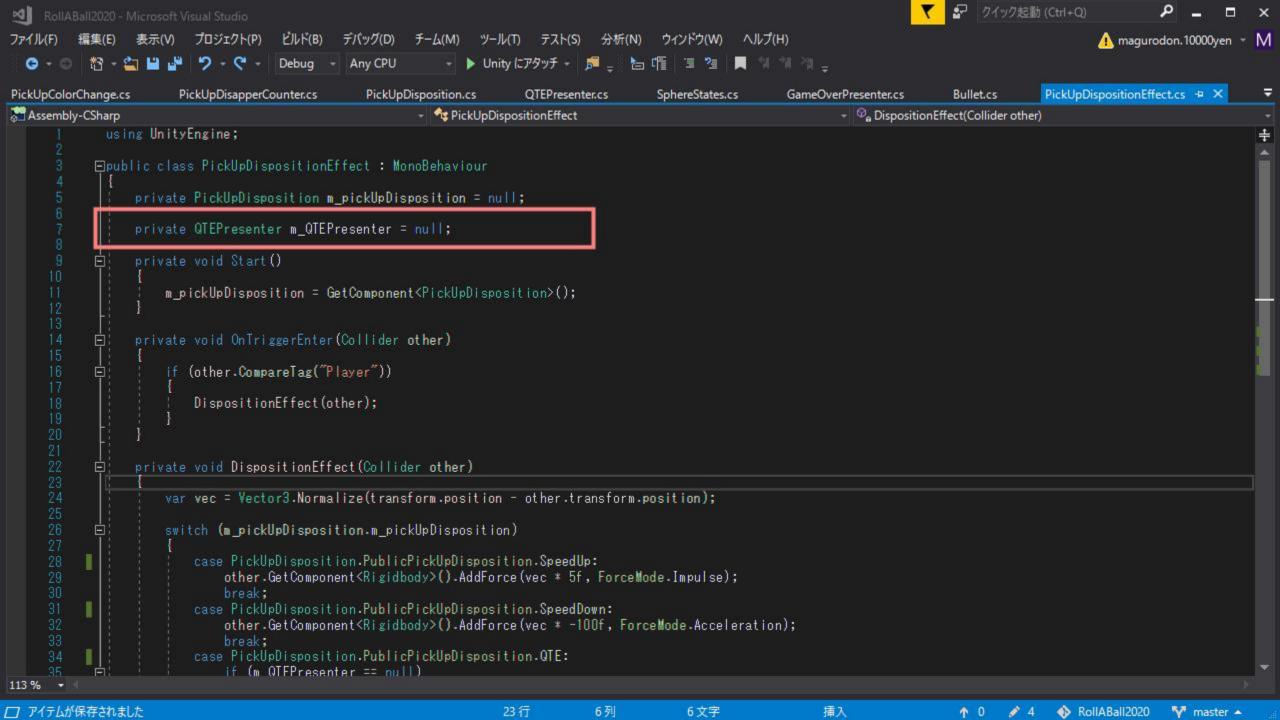


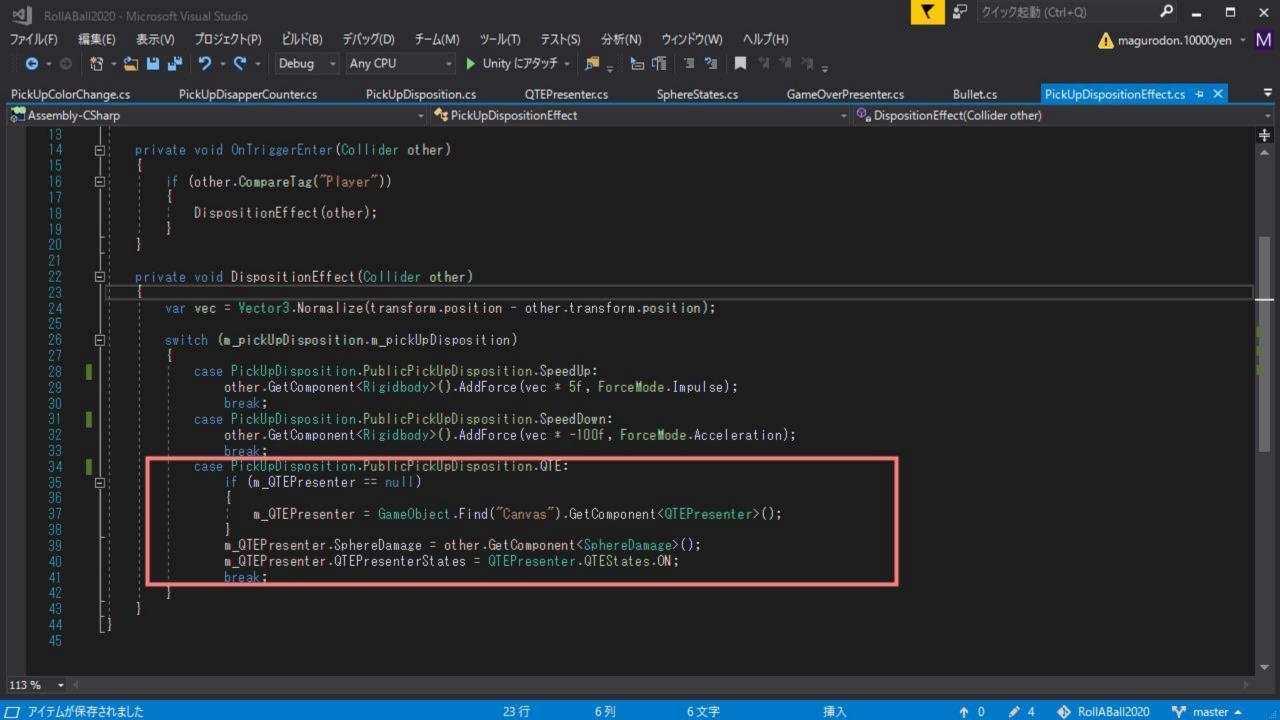
- Unityに戻って設定をしていきましょう
- Canvas直下にTextを2つ、 InputFieldを1つ作成してみてく ださい
- UIを作成する場合、すべて右ク リック→Create→UIの一覧の中 にあります
- 作成したtextを右図のような位置に調整して、色も変えておいてください
- Google検索していただいてもか まいません
- 自力でやってみましょう



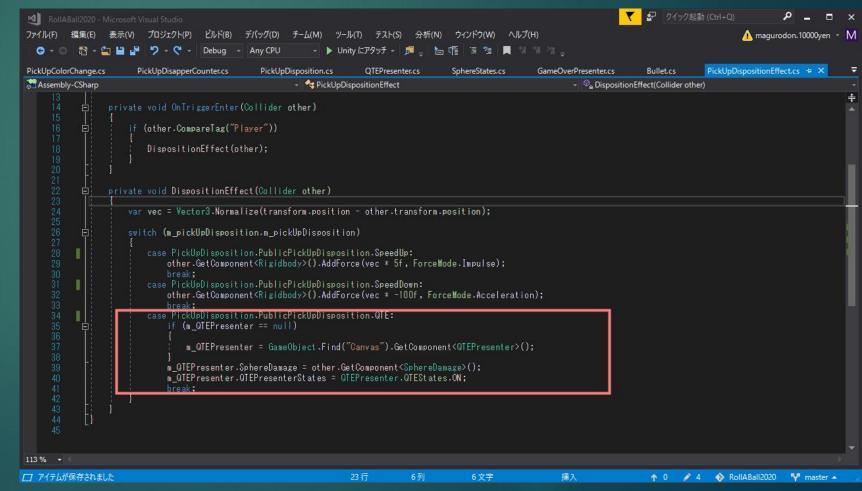
- 作成が終わりましたら、Canvas にQTEPresenterをD&Dして設定 していきます
- SphereDamageは空のままでも 大丈夫です
- ここまで出来ましたら、最初に 作成したPickUpDispositionの中 身もQTEを追加していきます



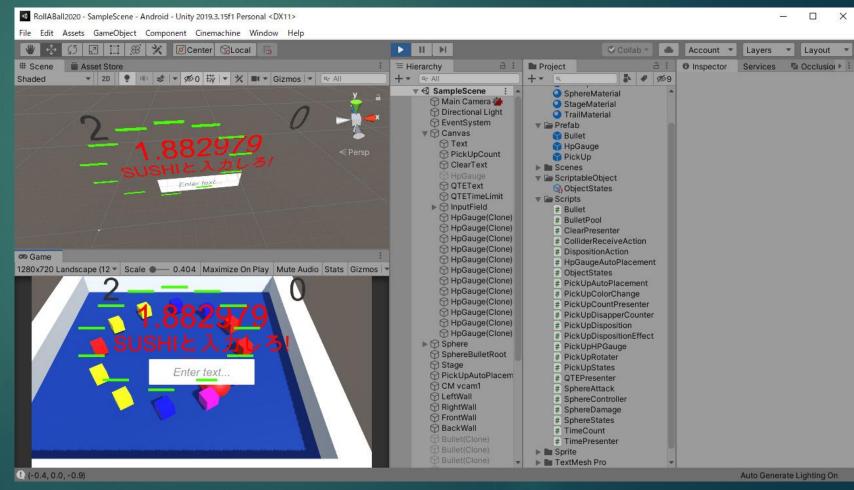


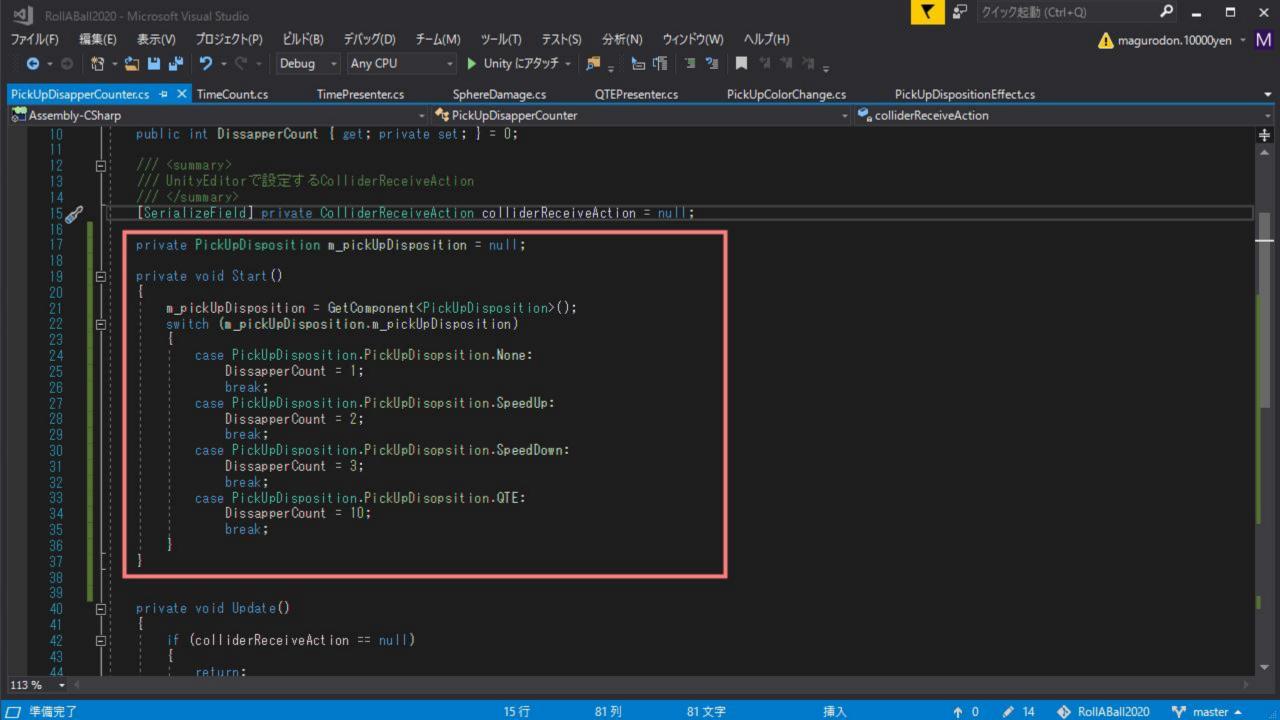


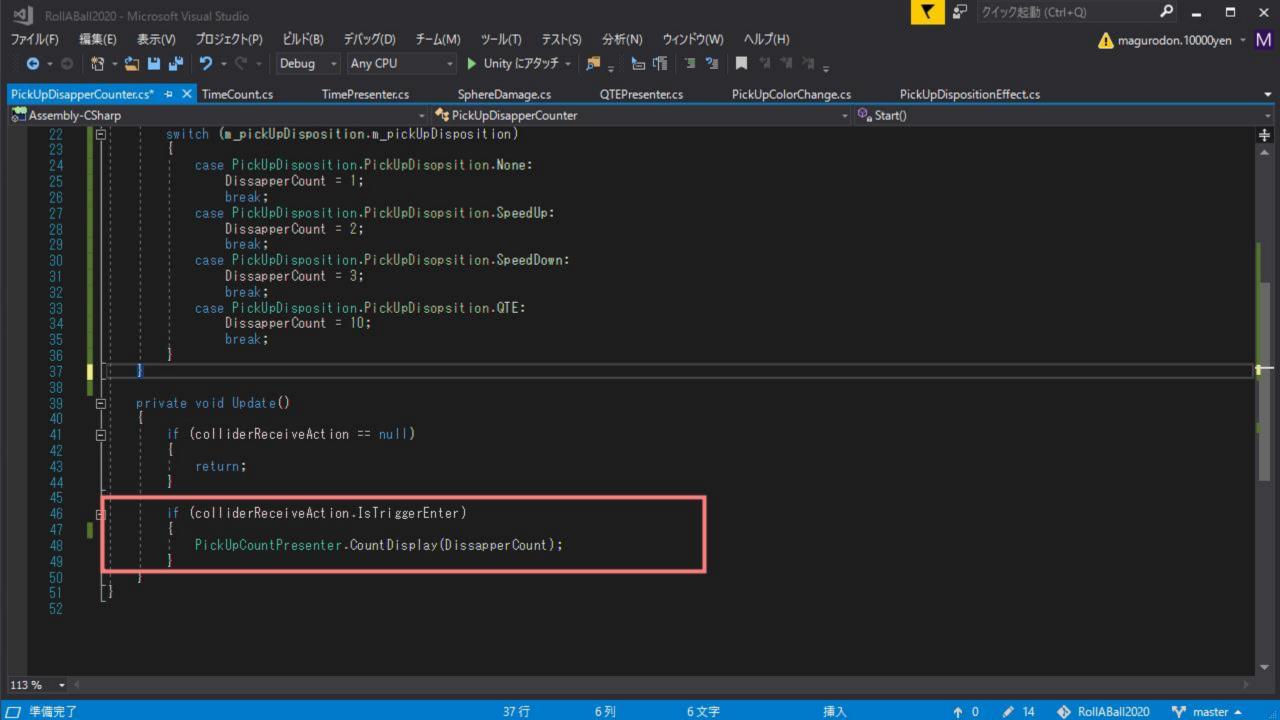
- **GameObject.Find("hoge")
- 英語のままですね
- 引数に入れられた名前の GameObjectを見つけてくれます
- ただし、この処理自体はScene 内のGameObjectすべてを走査 するので、CPU的に重たいです
- なのでなるべくクラス内の変数 にキャッシュすることをお勧め します
- ※キャッシュとは
- 毎回取得しにいくのではなく、変数に格納しておき、一回目以降はその変数を使うことです



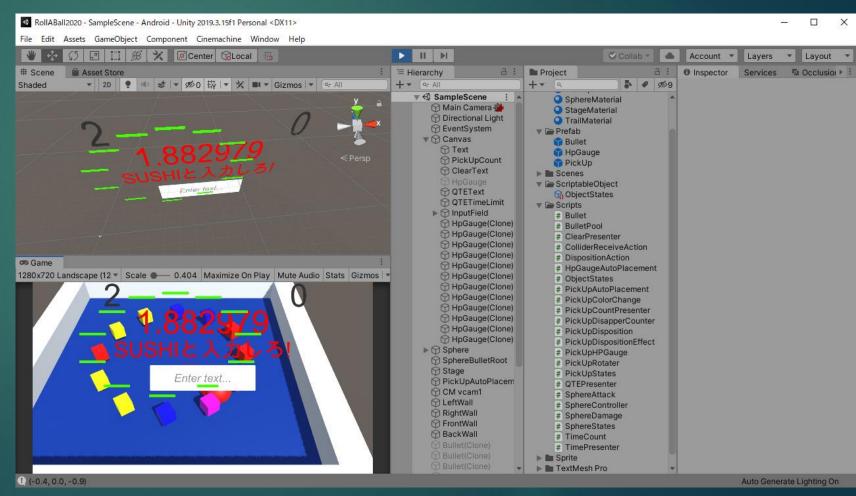
- これでQTEを発動させる準備が 整いました
- Unityに戻ってプレイしてみましょう
- SUSHIと入力すれば体力が回復 し、間違えば体力が減ります
- さて、色によって得点を変更していきましょう
- PickUpDisapperCounterを改修 していきます

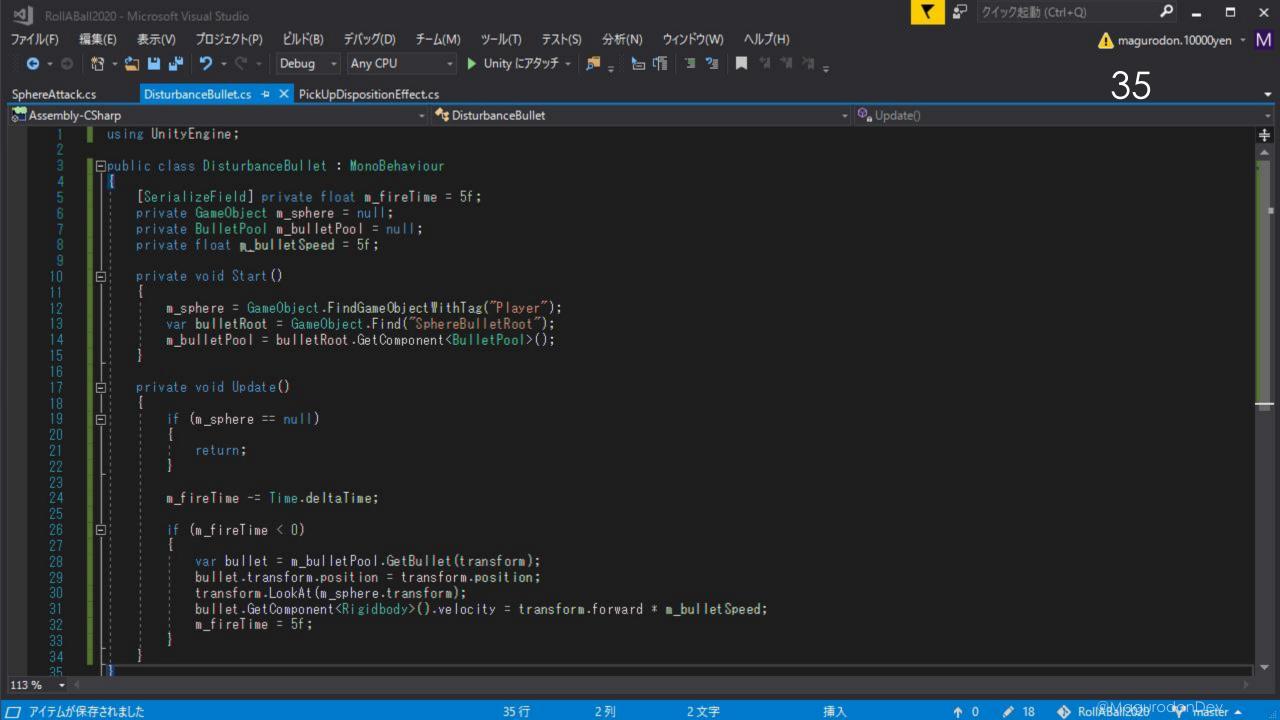






- プレイしてみると、色によって 得点が変わっていると思います
- さて、これでPickUp側の仕様は 全て満たしたことになります
- 後半は妨害要素をいれていきましょう
- まずはプレイヤーを襲う弾を 作っていきます
- DisturbanceBulletというスクリ プトを作成してください



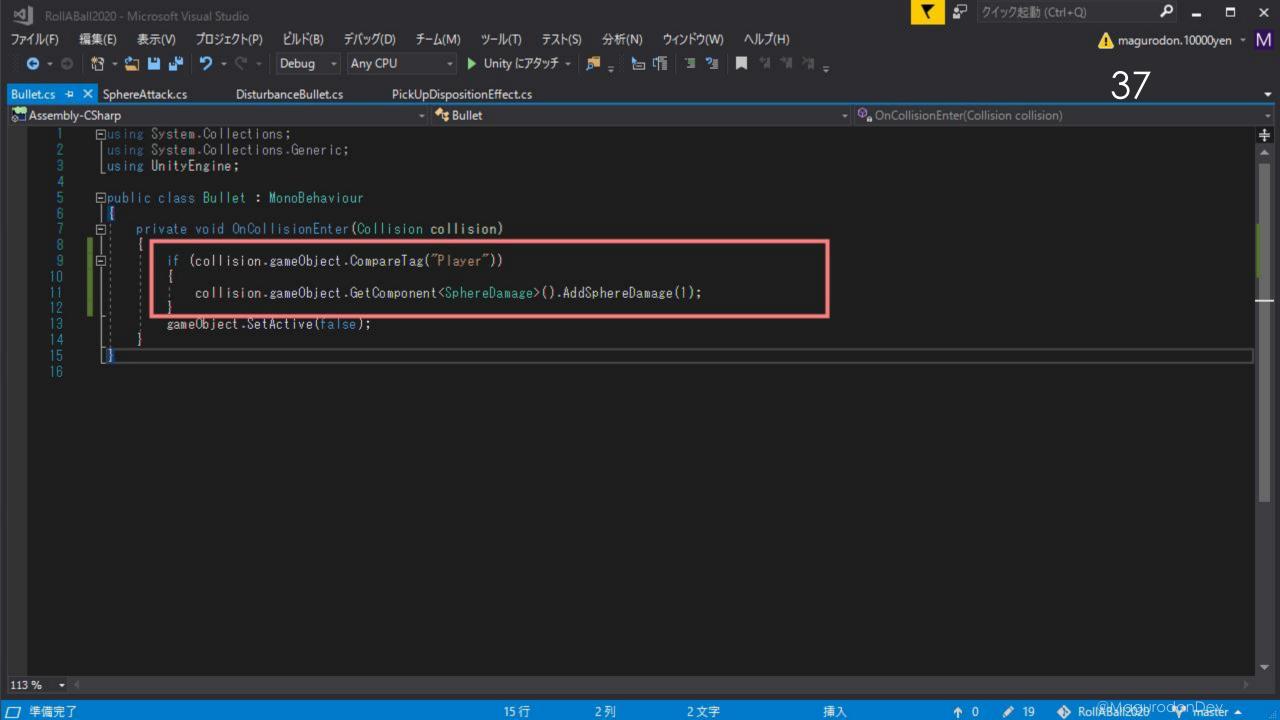


- **GameObject.FindGameObjectWithTag("Hogehoge")
- GameObjectをファインド(見つける)方法は主に名前で検索するか、GameObjectに設定されているTagを検索する方法があります
- 処理が軽く、CPUに優しいのは FindGameObjectWithTagです
- 次はBulletがSphereにダメージを与えられるように少し編集しましょう

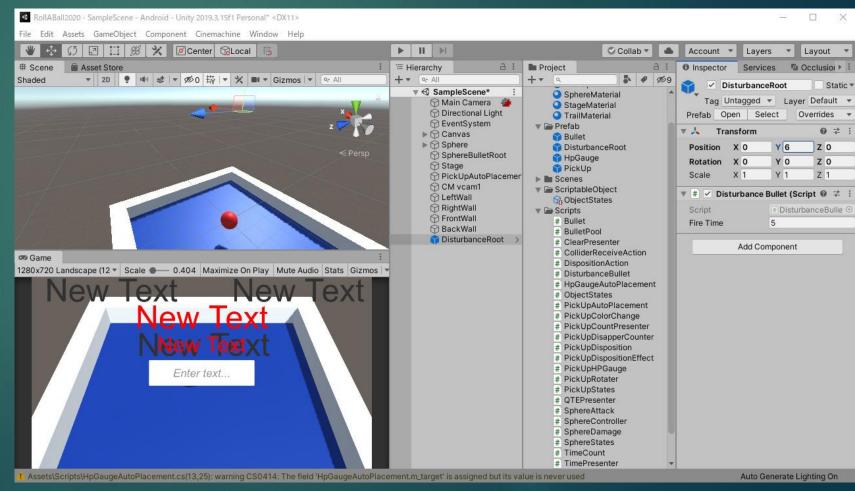
```
▼ かイック起動 (Ctrl+Q)
 RollABall2020 - Microsoft Visual Studio
 ファイル(F) 編集(E) 表示(V) プロジェクト(P) ビルド(B) デバッグ(D) チーム(M) ツール(T) テスト(S) 分析(N) ウィンドウ(W) ヘルプ(H)
                                                          - ▶ Unity にアタッチ - 月 _ 🔚 🏗 🖫 📜 📗
 SphereAttack.cs
                 DisturbanceBullet.cs + X PickUpDispositionEffect.cs
 Assembly-CSharp
                                                                                                               → 🗣 Update()

    DisturbanceBullet

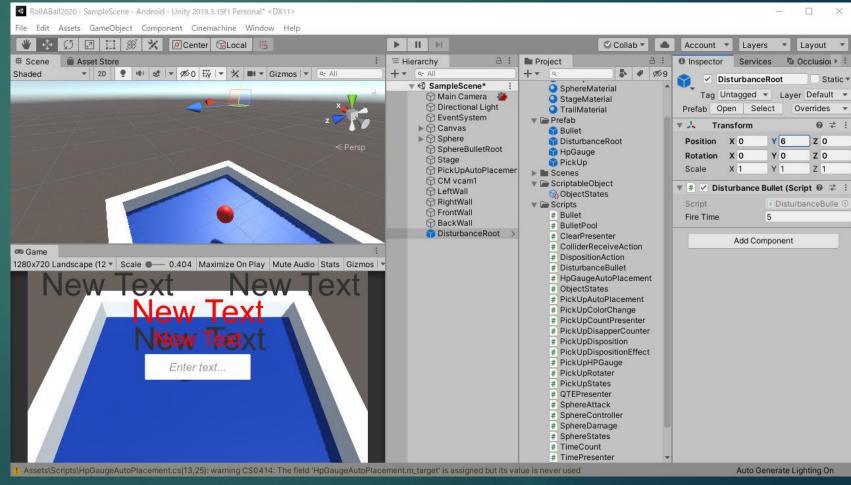
          using UnityEngine;
           Epublic class DisturbanceBullet : MonoBehaviour
                 [SerializeField] private float m fireTime = 5f;
                 private GameObject m_sphere = null;
                 private BulletPool m bulletPool = null;
                 private float m_bulletSpeed = 5f;
                     m_sphere = GameObject.FindGameObjectWithTag("Player");
                     var bulletRoot = GameObject.Find("SphereBulletRoot");
                     m bulletPool = bulletRoot.GetComponent(BulletPool)();
                 private void Update()
                       (m sphere == null)
                     m fireTime -= Time.deltaTime;
                     if (m_fireTime < 0)</pre>
                         var bullet = m_bulletPool.GetBullet(transform);
                         bullet.transform.position = transform.position;
                         transform.LookAt(m_sphere.transform);
                         bullet.GetComponent<Rigidbody>().velocity = transform.forward * m_bulletSpeed;
                         m fireTime = 5f;
113 %
□ アイテムが保存されました
                                                                                                            插入
                                                                                                                              ↑ 0 / 18 NollABall2020 W master -
```

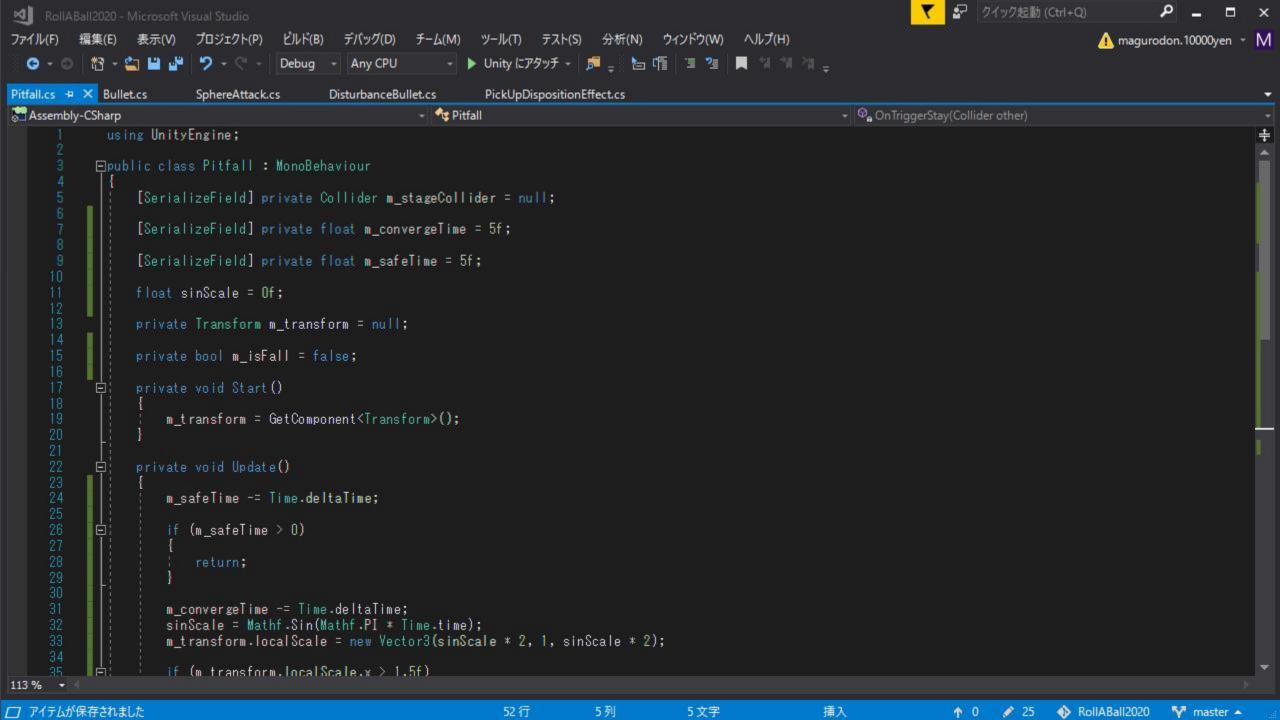


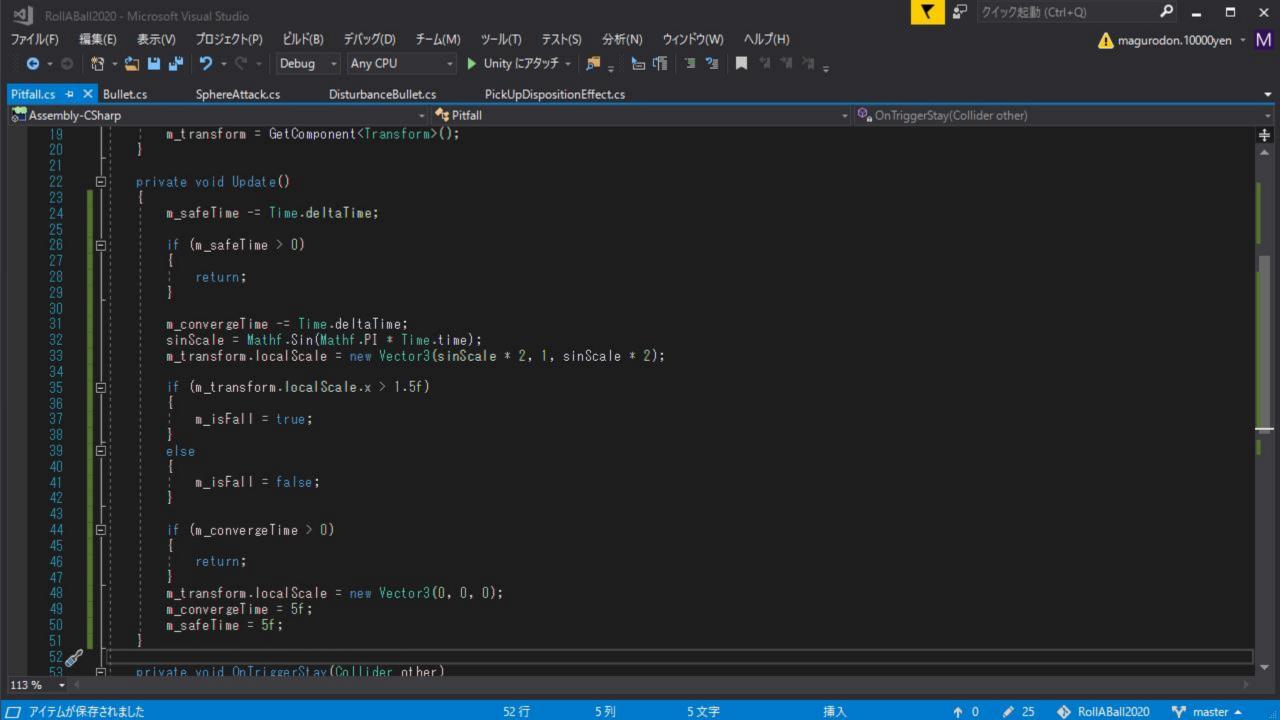
- Unityに戻ってCreateEmptyから [DisturbanceRoot]を作成して ください
- それをPrefabにしていただき、 今回作成したDisturbanceBullet をD&Dします
- Hierarchy欄に残っている DisturbanceRootのY軸に6を設 定してください
- ここまでできたらプレイしてみましょう
- 上からSphereに向けて弾が降ってくるはずです

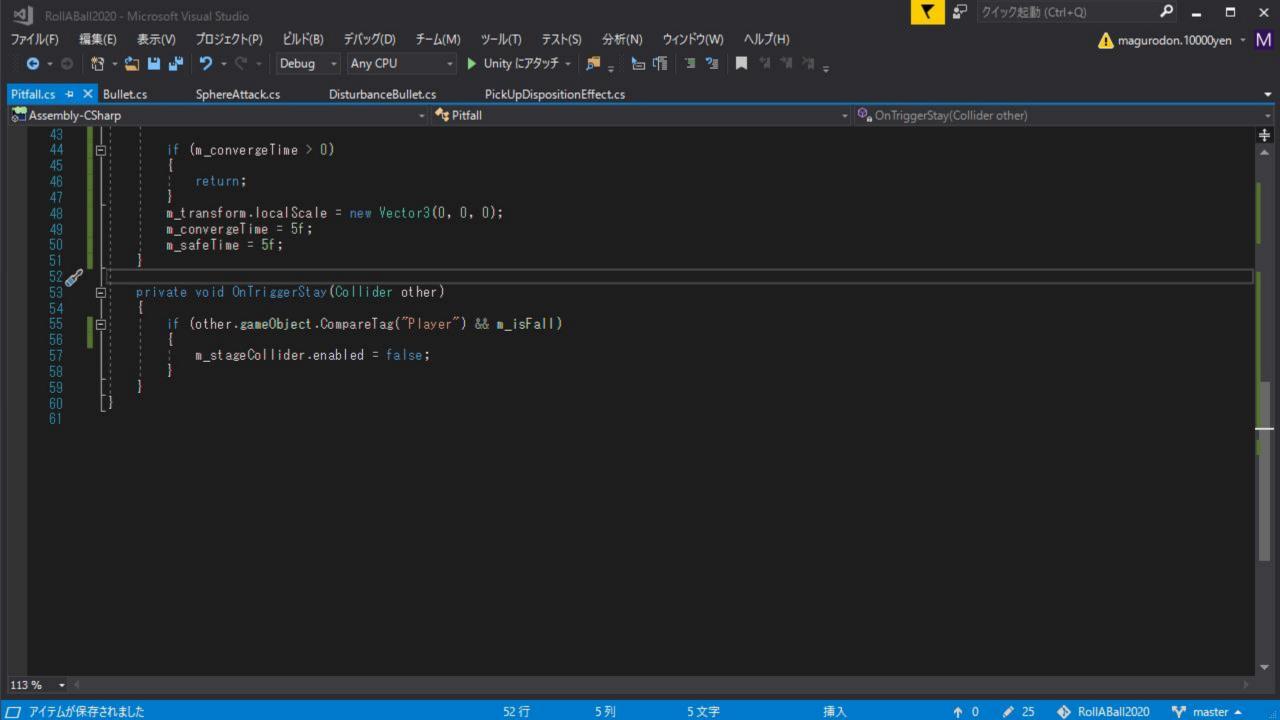


- Pitfallというスクリプトを作成してください
- SphereにあたるとStageの Colliderを消して、Sphereが落 下するようにします

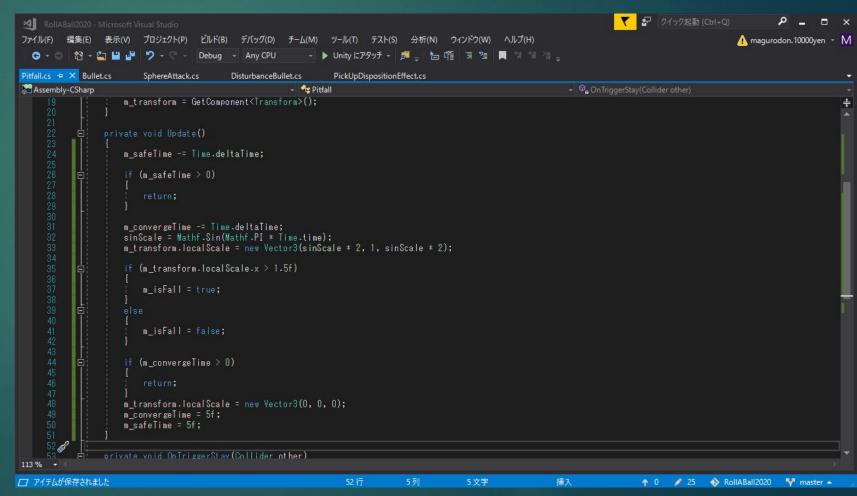




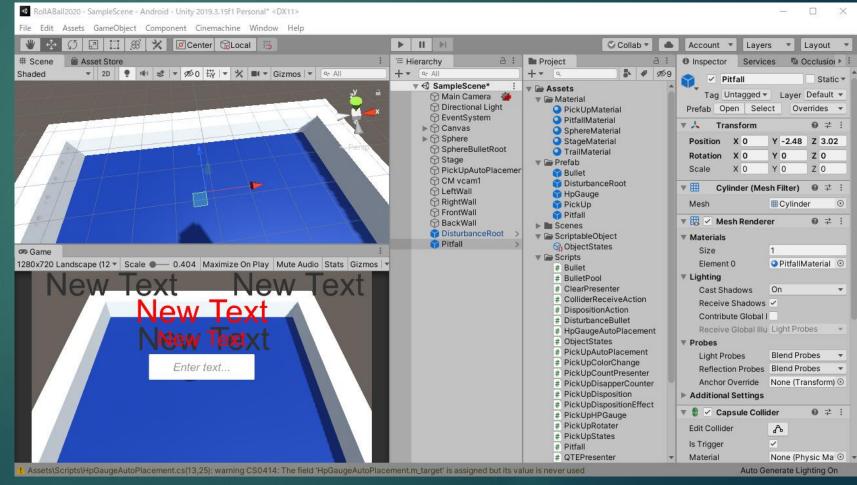




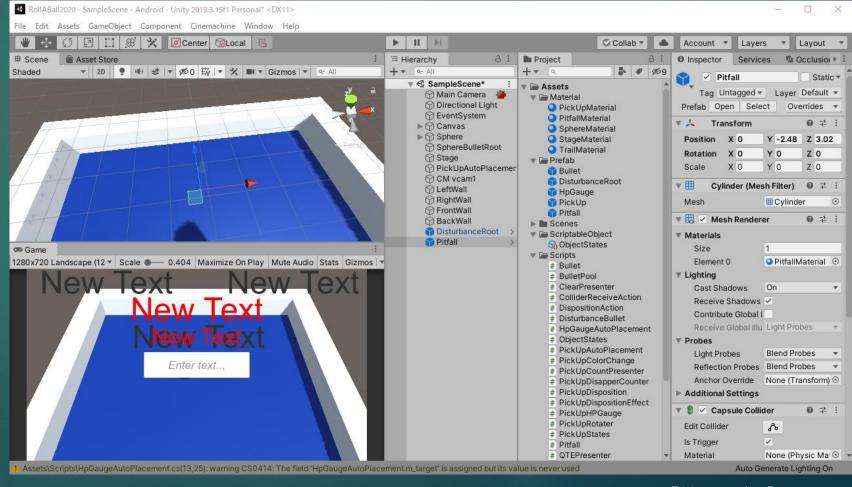
- ※Mathf.Sin(float)
- はい、またやってまいりました ね三角関数のSin
- Sinにpiを用いることにより、-1 ~1の間で新円を真上からみた円 運動を取得することができます
- 今回は滑らかに円が閉じたり開いたりするのに使いました
- 他にもいろいろと活用方法がありますので、数学の学びなおしはやっておいて損ではないです。

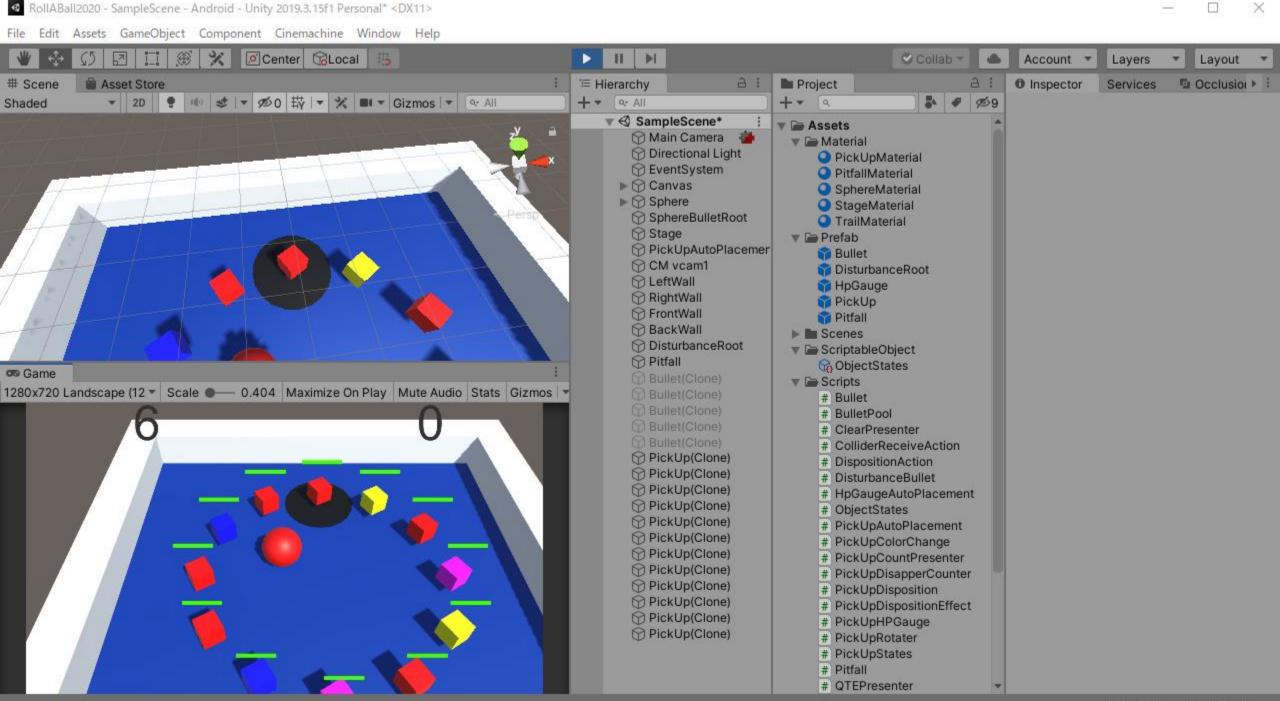


- ではUnityに戻って確認をします
- Hirarchy欄から Create→3DObject→Cylinderを 作成します
- これが落とし穴の変わりになる 穴に見立てたオブジェクトです
- 落とし穴を置きたい位置に移動 させてください
- Pitfallと名付けてください
- 今回のスクリプト[Pitfall]をD&D します

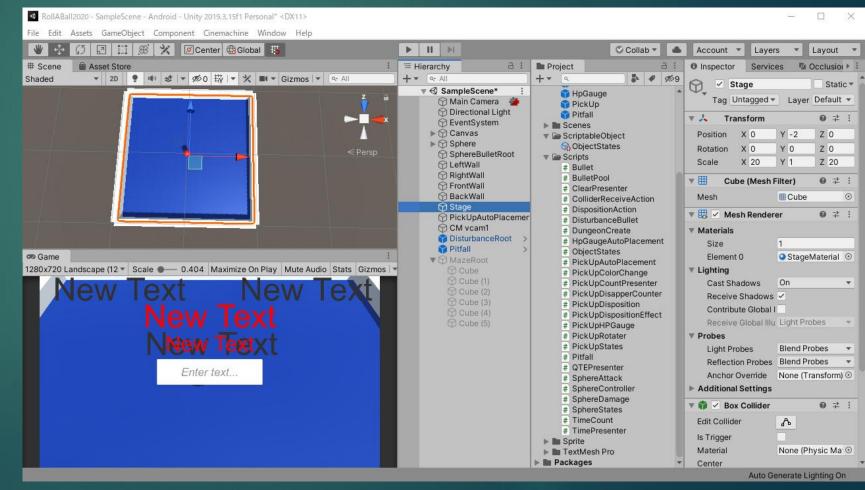


- これもPrefab化しておきましょう
- また、今は真っ白だと思いますので、Project欄から Create→Materialで [PitfallMaterial]というMaterialを作成してください
- 色を黒にしましたら、Prefabの PitfallにD&Dします
- これで落とし穴完成です
- プレイして確認してみましょう

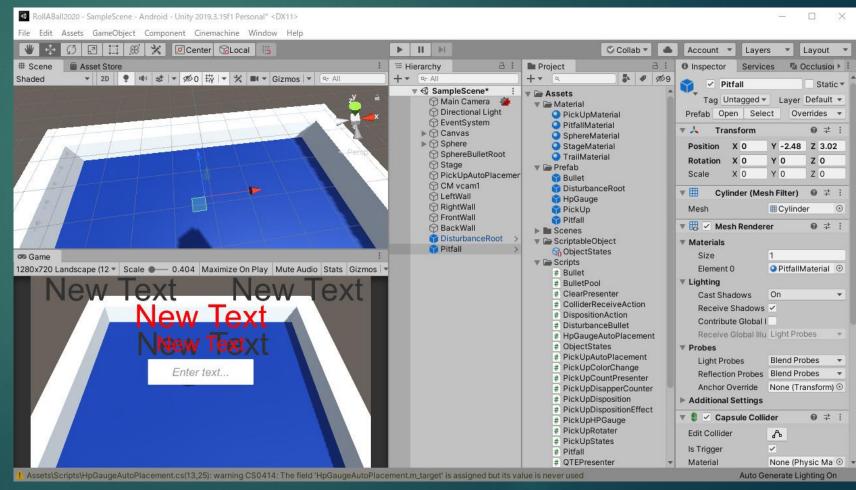




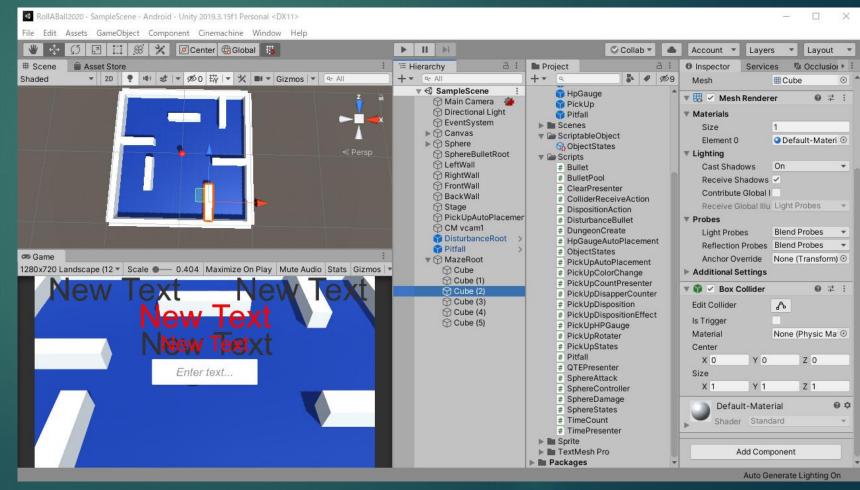
- これで一通り、妨害の仕様は満たせたと思います
- 最後に、迷路を作っていきましょう
- その前にステージが手狭になってきたと思いますので、少しスケールをいじってください
- StageのXとZのScaleを20にしてください
- 以前、好きに作っていただいた 壁を周りに合わせてください
- また、PickupAutoPlacementの Radiusも8に変更してください



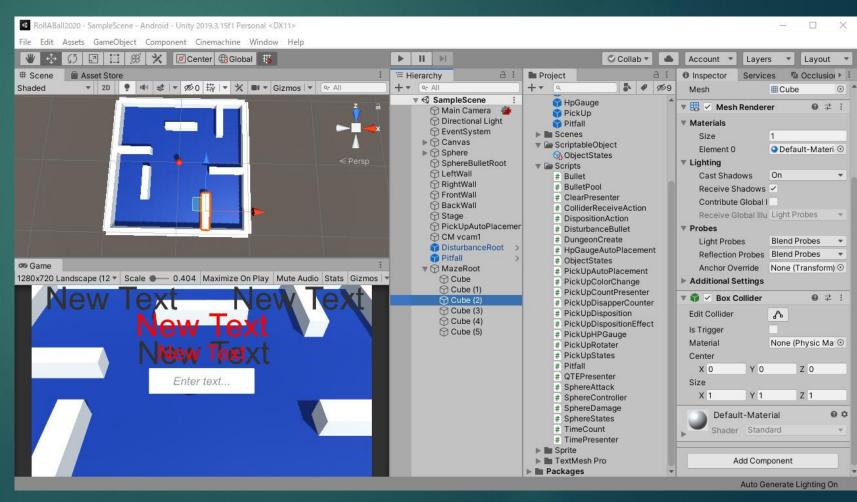
- 迷路に関してなのですが、一個 一個Cubeを置いていくのもいい のですが、やっぱり面倒臭いの で再帰処理を使って、と思った のですが、そのあたりは応用編 でやろうと思います
- Create→3DObject→Cubeを各 自作成し、TagをWallに変えてく ださい
- また、CreateEmptyで空の GameObjectを作成し、 MazeRootと名付けてください



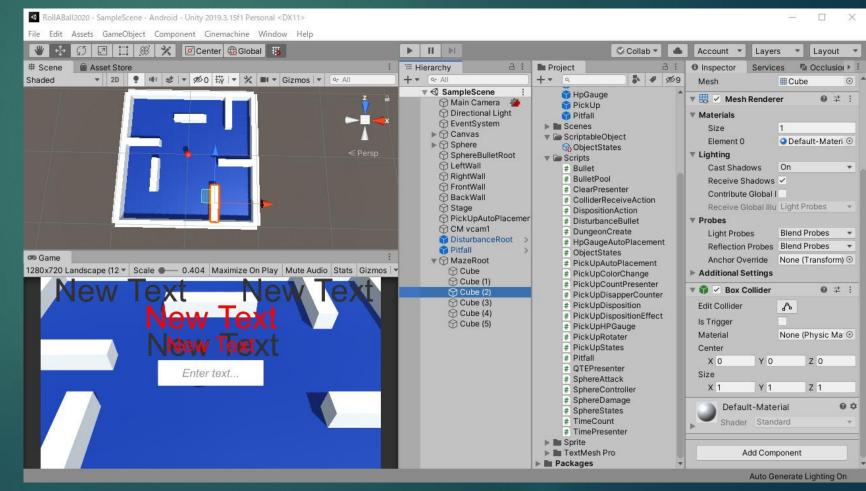
- MazeRootの子階層にCubeを配 置してください
- Scale等を変更して6つくらい自 由に置いて迷路を作っていきま しょう
- 少し時間を取りますので、ユーザーが面白いと思う迷路に仕上げていってください



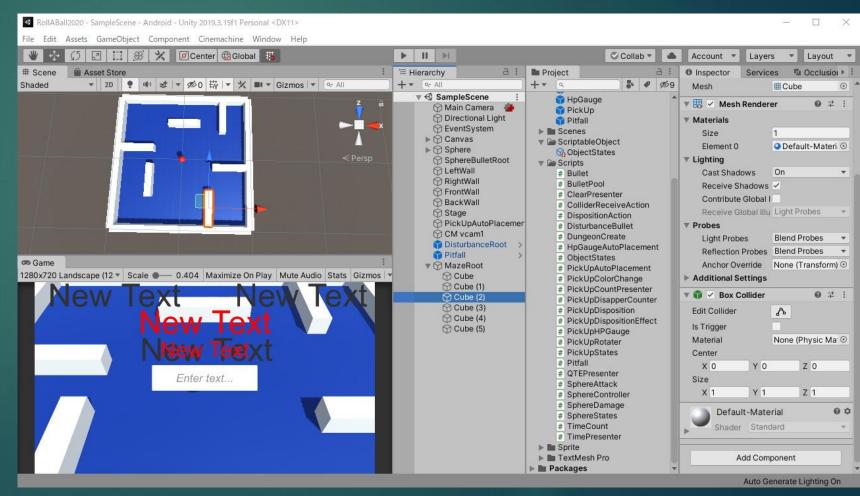
- そういえば、ゲームのクリアは表示されてもゲームオーバーの 演出がなかったので、ここで作成したいと思います
- GameOverPresenterをスクリプ トで作成してください
- ▶ このスクリプトの役目はSphere のHpが0になったら、ゲーム オーバーと画面に表示すること です
- ちょうどTimeScaleを使いましたので、ゲームオーバーのタイミングで時間を止めてみましょう
- 今回は各自、書いてみましょうか



- ・ ※ヒント
- SphereStatesの中にSphereの Hpがあります
- 時間を止める処理は QTEPresenterの中にあります。
- Textに表示する方法は色々ありますので、各自見つけてください
- あと、Pitfallのスクリプトに追加 で、落とし穴に落ちたとき、 SphereのHpにAddDamageで 10のダメージを与えてみてくだ さい



- 書きあげられましたら、Unityで 設定してみてください
- ここまで出来たら、本日の授業 は終了とします
- お疲れさまでした!
- 来週に関してですが、Unityでは なく、実際のゲーム業界、IT業 界で使われているGitというもの を学びます
- Unityを学習するうえで例えば、 ミスったり、PCの情報が消えて いたりすることがあると思いま すが、それをタイムマシンのよ うに変更履歴をたどって復元し てくれるツールです



Tips: GitHub

- ゲーム業界のみならず、IT業界では広く使われているツールです
- ザックリいうと変更履歴を保存しておけるので、変更したタイミングに処理や手を加えた分を巻き戻すことができます
- 創作活動やプレゼン資料の作成等にも効果的に使う事ができます。
- 変更単位で巻き戻したりすることができるので、Aという機能を追加したはいいものの、使わなければそのAのみを変更履歴から除外することができます

